

介護福祉のこころ育てる教育への一試み ～ボランティア活動を通して考える～

福祉学科 福原信子

I、自覚うながす介護教育の実践をめざして

1、はじめに

(1) 福祉学科にとって問われるもの

①福祉学科にとって、介護福祉士をめざす学生の意識向上を促すうえで必要なことは何か、が常に問われるところである。それはカリキュラムを遂行するにあたって福祉学科が定める目標の内容を点検しつつ、創造的にすすめることである。これは本学では実践力につながる介護福祉教育として目標が設定され日々具体的に行われている。同時に、一定のカリキュラムの実施時期や一区切り期をチャンスに、必ずしも当初目標に設定されていない場合も含めて独創的な対策を行うことも効果的ではないかと考えられる。ここではその具体例の一つとしてボランティア活動を活用した経験について検討することにした。ボランティア活動は本来各人が自主的自覚的に参加するものであるが、このとりくみでは第1段階施設実習にそなえ、介護概論の授業の一部と位置付け全学生が夏休み期間の内数日間これを行うよう指導した。各学生は自ら選択した施設で、申し込み、手続き、日程などを自主的に決めてボランティア活動を行った。なお、このボランティア活動に入る前の段階として、入学まもない6月、高齢者を理解することを目的に、医師早川一光先生の講演記録ビデオ「老いる」(約90分)を鑑賞させた。その上で、「私の60年後」のテーマでレポートを提出させた。これは「老い」は他人ごとではなく自分の問題としてとらえることに有効と考えたからである。

こうした経緯で、本稿は主に介護福祉士をめざす学生の意識の向上を促すうえで、ボランティア活動のはたす役割についてのとりくみ経過の報告である。

②問題は何故第1段階施設実習の前にボランティア活動なのか、又そこに何らかの関連性があるのか、等である。従来施設実習に際は、1回生の夏休み前7月に当該施設におもむき、その施設が主になどのような介護をどのような流れの中で行われているかを、2時間程度の施設見学を行う程度にとどまっていた。そして1回生の冬休み2月に第1段階施設実習に携わるのである。そこでは、はじめての経験であるのは勿論であるが、介護行為も施設内の仕事の流れも分からないまま、学生たちは心理的負担を感じることになる。こうした状況のなかで、学生生活として各自が介護福祉士養成への初期の段階で抵抗を少しでもやわらげ、カリキュラムをスムーズに遂行するに必要な何らかの対策を思考してきた。たまたま私(福原)が学内のボランティアクラブ顧問の立場であるところから、これを活用してはどうかと考えるようになった。

- ③介護概論という授業の一部であっても夏休み中の日程のなかであり、しかもボランティアという方法であるので、全学生にその主旨をよく理解してもらうことが必要になる。同時にこのとりくみは単に実習前で終わりとすべきではなく、その間の学生の意識とその変化、そして実習後にどのような役割を果たしたか、の追及も考慮に入れながら計画をすすめた。もちろんプラスの効果だけでなくマイナスの要因となることもあるとしても、実施することにした。
- ④具体的な経緯は、第1に、施設の選択は各県社協の夏のボランティア体験情報誌等を参考に各学生から夏休み中のボランティア体験の「計画と調査書」を提出してもらった。「施設名」「選んだ理由」「学びたいこと」とともに選んだ施設についての調査（文献や図書館で）などである。第2は、ボランティア終了後のアンケートの提出である。ボランティア施設（種類）や期間、参加した結果の判断、今後に役立ることなどを内容としたものである。
- 第3は、第1段階実習後のアンケートの実施である。ここでは夏休みボランティア活動が、この実習に役立ったこと、又役立たなかったこと、及びこの体験が後期授業にどのような影響をおよぼしているのか、などである。

(2) 1年がかりで追跡調査

- ①こうしたとりくみを始めた背景について、最後にふれておきたい。現在のカリキュラムでは専門書をはじめ書物を読み、思考をまとめ表現することが充分でない学生が存在することを考慮せず定められた1650時間の専門教育を行うことになっている。学生の中から「内容が分からない」、「難しい」、「自分は福祉に向いていないのではないかと迷っている」などの状況もよく聞かれることがある。しかし、自分探しが不十分なまますぐに施設実習がせまり来るもとの、不安を募らせる学生は、「これでよいのだろうか」、「介護福祉士としてやっていけるだろうか」という心理状況をすこしでも解消したいと考えてのとりくみである。
- ②この一連のとりくみは1回生42名中41名が全てに参加した（最初のレポートのみ提出は39名）。平成17年6月より翌年度の18年6月までとなった。本稿はこれらが介護福祉士養成にどのように寄与しているかどうかを検証しようとするものである。

2、本学での介護福祉教育と求められる介護福祉士像

(1) 実践力につながる介護福祉教育をめざして

- ①本学の福祉教育の目標は明確に示されている。主なものを列挙すると、
- 介護福祉士の資格はもちろん、相手の気持ちができる介護ができる能力をもった、人間性豊かな人材の育成。
 - 福祉の仕事のやりがいを確認できる第1段階から第3段階までの施設実習と学内での学びを基礎に、福祉のニーズなどと援助方法を身につける。
 - 学園祭やクリスマス交流会などを自主的に企画実施し、楽しく参加する学生生活を送る。
- ②これらの目標を実施するに当たって、一般的カリキュラムは特徴的な授業形態も採り入れている。
- 福祉音楽論として、楽器の演奏、歌などを福祉の現場で実践できる音楽セッションを学ぶ。
 - 形態別介護技術として、障害者の現状を理解し、生活福祉のあり方を考察する。

- 介護実習として、授業で学んだ理論や技術をフルに生かして介護活動を体験的に学ぶ。
 - 実習指導として、実践能力をやしなうためのテーマを設定し、ゼミ形式で課題研究を行う。
- このようにして、介護される立場にたった感性豊かな介護福祉士の育成を目指すことにしている。
- ③こうした目標を設定し特徴的授業を採り入れたとしても、全ての学生がこれを身につけ期待される介護福祉士に成長するとは限らない。学生がきびしい生活環境や喧騒な世情のもとで、2年間の修業期間のなかで自らの人生設計が描けきれず悩み、苦しむ状況も生まれることがありうる。われわれ教員はカリキュラムをこなしていれば“良し”というわけはいかない。学生の心の戸をたたき、励まし、いかりや慰めと感動を共にするよう努めねば成らないだろう。ボランティア活動という自主的、自覚的とりくみのなかで、期待される介護福祉士像の全ての要件を満たさなくても、実践力につながる人間性豊かな介護福祉士に育ってくれることを期待するものである。

(2) 自らの介護福祉士像を描けるように

- ①先に実習前のボランティア活動の義務づけの動機の一つとして、基礎学力の不十分な学生がその学ぶ意欲を損なわないよう教員側のとりくみの必要性をあげた。読む、考える、記録する、表現するという基礎的教養力を考慮せず、いきなり1650時間の専門教育では一寸迷っているうちに実習がはじまり、2回生にすすんだという状況では学習意欲や自らの介護福祉士人生の未来図は描けないことになる。これは学生にとっても教員にとっても課題を負う状況をつくりだす。
- ②一方、「福祉専門職の教育課程等に関する検討委員会報告書」に、「期待される介護福祉士像」が示された。その内容は5項目に要約され、目指す目標としてきわめて明確である。「感情豊かな人間性と幅広い教養を身につけ……介護を必要とする人との信頼関係を築くことができること」、「要介護者の状況を判断し、それに応じた介護を計画的に実施し、その結果を自ら評価できること」、「介護を必要とする人の……人権を尊重し、自立支援の観点からの介護を……」、「他の保健、医療、福祉従事者との連携……」、「……自己研鑽とともに後進の育成……」である。問題は、こうした目標を2年間の学生生活の中で自己目標として育成されるよう教員の努力が求められることである。本稿で追跡記述するように、「老い」を考えるビデオ鑑賞とレポート提出、ボランティア計画と調査、介護実習前のボランティア活動とその結果アンケートなどが学生の意識を一定変えることができるが、充分とは言えない。介護福祉士は独立した仕事ではなく多くの職種の人々と共同して社会を支える役割と誇りを身につけるように、教員の側が目的意識的に指導することなどが求められるであろう。これらの積み重ねが“期待される介護福祉士像”誕生へ導くと思われる。

II、具体的な教育実践のプロセス

1、「老いる」ということを”はじめ”に考えるために

(1) 自分のこととして受け止めるように

- ①福祉学科に入学した学生といっても全員が将来展望として介護職を身につけるところ決めていない。決めていても一抹の不安を抱えながら成長するというプロセスが一般的である。そ

ここで介護職への入門的課題といえる「老いる」ということを考えてもらうことにした。それにふさわしい教材として、「老い」の問題を追及し社会的に知られ、また平成15年度の本学の公開講座の講師に依頼した経験のある医師早川一光先生の公開講演会のビデオ「老いる」(約90分)を活用させて頂いた。

- ②「老い」は誰しも生まれた時から始まり、生きている限り避けることが出来ない。老いは高齢者だけの問題ではなく、全て生きている人の問題である。そしてこの「老い」を自分のこととして考えてもらうことにした。その上映のときの学生の反応は、はじめて自らに課題が突き付けられたように受けとめる者や家族に祖父母のいる家庭では自然の流れの中で老いを感じるといったような雰囲気が感じられる様子であった。

(2) レポート「私の60年後」では

- ①ビデオ上映の後、「私の60年後」のテーマで自分の将来に想像を馳せてレポートを提出してもらった。(このレポート提出は39名)
- 学生は「せめて20年後やったら」とか「60年後を考えるなんて初めての体験」等と言っていた。私(福原)が「60年」という年を設定したのは高齢化社会のなかで、いわゆる現役時代が終わり後期高齢者の入口の年齢で自分はどのように生活しているか、またしていくべきかを、今の社会的条件をも忘れることなく現在の年齢で考えて欲しかったからである。
- ②ほとんどの学生が夢を持ちつつ楽しく暮らしたいという意向がみられる。いくつかのレポートをあげてみる。
- 「……時代が変わり『アトム』みたいな時代、『ドラエもん』みたいな時代になっていたら、いろんな場所にパスポートなしで行ったり、宇宙に行ったり……。平和で人情味があふれる国になりたい。」Kさん。
- 「私は介護されているのかなあとか、介護しているのは人か機械かどっちだろうか。人間とロボットが共存しているんじゃないかと思います。……住みやすい地球でゆっくり過ごしたい。」Sさん。
- 「私は23-25歳で結婚し、子ども2人を授かり、夫、子どもと仲良く暮らしていきたい。……私の中に『老いる』ということに何か抵抗があります。……78歳まで生きてこのレポートを読み返すことができれば幸せかも……。」Yさん。
- 「……家に人とコミュニケーションとれる感情型ロボットが来るかも知れない。……いつも笑顔で楽しく、つらい時は友達、家族と支え合うこと……。」Iさん。
- 「『老いる』ということを考えることはとても難しいことだけれども、決して遠い先の話ではないということをおき、これから頑張っていきたい。」Sさん。
- 「いろんな事に挑戦して、いつまでも夢を描けたらすごく素敵です。……たくさんの子どもと孫に囲まれて苦しまずスット息を引きとる……最高の人生終わり……。」Nさん。

2、夏休みふれ合いボランティア体験の計画と調査書の提出

(1) 本学ではじめての具体的とりくみ

- ①特別養護老人ホームなど各福祉施設がどのような目的と役割をもって設立されているかなどについ

ては、介護概論のテキストから学ぶものであるが、先に述べたようにテキストに指示はないが本校ではじめて1回生全員に夏休みふれ合いボランティア活動を体験させることとした。そのボランティア体験をする前段として各学生よりその計画と調査書を提出させた。そのボランティア施設は各学生が自ら選定することとした。

②その計画の内容は、

○「ボランティアに行く施設名」

○「選んだ理由」

○「学びたいこと」、の3点について記述してもらうものである。

そして行くべき施設に関して、文献や図書館で調査し、又は社会福祉協議会で聞くなど、6項目にわたって調査報告させた。「どのような種類の施設か」、「どのような法律に基づいて設立されているか」、「施設の設立目的」、「利用対象者は」、「利用する場合の手続きは」、「その施設にはどのような職種の人が働いているか」である。41名の学生が提出した。

(2) ボランティアに行く施設では（計画書の記述では施設名が書かれているが）

①入所施設記入が18名。内「老健施設」1名、「特別養護老人ホーム」11名、「グループホーム」5名、「障害者入所施設」1名、である。

②通所施設記入が23名。内「デイサービスセンター」17名、「障害者デイサービスセンター」2名、「社会福祉協議会」1名、「保育所」3名、である。

(3) 選んだ理由は（複数記述あり）

①入所施設希望では

○主に「施設」を中心に考えて、「家に近い」8名、「知人の働く施設だから」2名、「施設訪問したことないので」1名、「良さそうな施設だから」1名、である。

○利用者又は介護の内容に注目して、「特養施設とはどういうところか知りたくて」3名、「施設で生活している方はどんな方か知りたくて」2名、「多くの利用者さんとふれ合いたい」1名、「コミュニケーションを多くとりたい」1名、「認知症の人のいろんなことを知りたい」1名、「知的障害の人にふれ合い役立ちたい」1名、である。

②通所施設希望では

○主に「施設」を中心に考えて、「家に近い」7名、「知人が働く施設だから」8名、「デイサービスへいくことがないので」2名、「以前ボランティアした施設だから」1名、「子どものとき通園していた」1名、「市役所で紹介してもらった」1名、である。

○利用者又は介護の内容に注目して、「福祉施設とはどんなところか知りたい」4名、「健康な利用者にはコミュニケーションとりやすいと思うから」2名、「地元でボランティアすることはないと思うから」1名（以下各1名）、「利用者の笑顔が見たい」、「入浴や着脱の援助したい」、「多く方とふれ合いたい」、「デイサービスの業務の内容を知りたい」、「障害のある人とふれ合いたい」、「障害のある人のデイサービスを知りたい」、「障害のある人と遊んだり接したい」、「認知症のある方との会話のとり方を知りたい」、「認知症の方の生活を知りたい」、である。

(4) 学びたいことは（複数記述あり）

- ①入所施設では、「コミュニケーションのとり方」8名、「施設はどういうところか知りたい」2名、「食事介助など利用者の1日の過ごし方知りたい」2名、「入浴、食事、おむつ交換の援助など介護技術を学びたい」2名、「介護職員の働き」1名（以下各1名）、「介護者の利用者への接し方」、「入所利用者に介護者はどう対応するか」、「介護の実態を知りたい」、「知的障害者への接し方」、などで、ここでは全員が利用者又は介護の内容に注目している。
- ②通所施設では、「利用者とのコミュニケーションを体験したい」10名、「利用者によるこんでもらえる方法」4名、「いろんなこと学びたい」3名、「職員の方の働き方、安全への気配りと予防」3名、「デイサービスの仕事の内容」2名、「デイサービスの特徴と違いを知りたい」2名、「小さい子ども日々の言動、過ごし方」2名、「高齢者の介護の体験と仕方」2名、「自分の技術面がとほしいので」1名（以下各1名）、「利用者はどのように思っているか」、「食事介助の行われ方」、「利用者の行動パターン」、「どのような職種の人が働いているか」、「子どもたちへの接し方」、「障害について」、となっている。ここでも全員が利用者又は介護の内容に注目している。

3、夏のボランティア体験を経てアンケートに

(1) 現場で感じたことを8項目で聞く

- ①平成17年6月に提出させた夏のふれ合いボランティア計画は、7、8月中に各人が参加することになっている。ボランティアとはいえ学生にとってはじめての介護現場に出会うことになる。「老い」のビデオ鑑賞とレポート提出に続く「計画と調査」のアンケートにより一定の精神的準備が用意されたうえで「現場」へ臨んだことになる。ボランティア施設等はおおむね自らの「計画」に沿ったところへ参加している。
- ②アンケート項目は
- ボランティアに行った施設……6項目
 - ボランティア期間（月日～月日、合計日間）
 - 体験して「良かった」、「悪かった」
 - ボランティア施設は期待や要望に応えたものであったか……4項目
 - ボランティア情報はどのような方法で知ったか……5項目
 - ボランティアに参加して特に学べたことは何か……3点を
 - ボランティア体験が今後の実習に役立つと考えられるか……3点を
 - ボランティア体験しての要望などがあれば、となっている。
- ③なおこのアンケートとは別にボランティア体験で学んだことや今後役立つこと等についてくわしく記述したレポートを同時に提出させた。ただアンケート項目と同主旨で重なることであり本稿では集約していない。

(2) 行った施設では

- ①入所施設は19名（46.3%、以下同じ）
「特別養護老人ホーム」11名。「老人保健施設」3名。「グループホーム」5名。
- ②通所施設では22名（53.7%、以下同じ）

「デイサービス」19名。「保育所」3名。

(3) ボランティアに行った期間（平均2.34日）

①入所施設では（平均2.5日）

「特別養護老人ホーム」2日間5名、3日間6名。「老人保健施設」2日間2名、3日間1名。「グループホーム」2日間2名、3日間3名。

②通所施設では（平均2.2日）

「デイサービス（障害者施設含む）」1日2名、2日12名、3日4名、4日1名。「保育所」2日3名。

(4) ボランティアを体験して

①入所施設では

「良かった」19名。「悪かった」0。

②通所施設では

「良かった」22名。「悪かった」0。

(5) ボランティア施設はあなたの期待や要望に応えたものでしたか。

①入所施設では

「強く思う」8名。「思う」11名。「思わない」0。「全く思わない」0。

②通所施設では

「強く思う」10名。「思う」11名。「思わない」1名。「全く思わない」0。

(6) ボランティア情報はどのような方法で知ったか。

①入所施設では

「ボランティア情報誌」5名。「社会福祉協議会のホームページ」0。「地域の社会福祉施設から」2名。「友人などから聞く」7名。「その他」5名。

②通所施設では

「ボランティア情報誌」15名。「社会福祉協議会のホームページ」3名。「地域の社会福祉施設」0。「友人などから聞く」2名。「その他」2名。

(7) ボランティア体験で特に学べたこと（各人から3点まであげてもらい、出された内容を4つに分類して集計）

①入所施設では

○人間関係を中心にしたこと（計で26名）

「コミュニケーションに関して」12名。「利用者との対応」3名。「笑顔がいっぱい」2名。

「利用者といっしょに仕事」2名。「利用者が楽しむ工夫」1名（以下各1名）。「利用者との信頼」。「気配りの大切さ」。「言葉はゆっくり話す」。「利用者の性格を知る」。「人のやさしさ」。「利用者の要望に応える」。

○施設での仕事の内容に関すること（計で11名）

「介護の現場を見学できた」4名。「職員が仕事をテキパキしていた」2名。「施設の内容を知る」2名。「グループホームとはどんなところか」1名。「認知症の特徴」1名。「仕事の大切さ」1名。

○日常援助に関すること（計7名）

「食事介助の方法」4名。「おむつ交換の方法」1名。「シーツ交換」1名。「利用者の自立した生活」1名。

○その他（計2名）

「高齢者の身体のこと」2名。「体力、自己管理の大切さ」1名。

②通所施設では

○人間関係を中心にしたこと（計35名）

「コミュニケーションに関して」15名。「利用者の気持ちに合わせる」2名。「声かけを行動の前に」2名。「利用者の性格を知る」1名（以下各1名）。「相手の立場で言葉を選ぶ」。「利用者とのふれ合い」。「利用者はしっかりしていた」。「人前ですることは楽しかった」。「利用者より前に自分が楽しむ」。「大きな声で話かける」。「利用者のよろこび」。「秘密を守る」。「遊び方」。「自分から積極的に」。「皆で楽しむ」。「利用者の目線に合った会話」。「自分の子どもの大切さ」。「相手のことを受け入れる方法」。「何をすれば相手に伝わるか」。

○施設での仕事の内容に関すること（計8名）

「1日の仕事の流れと利用者への対応」4名。「施設の仕事の内容」2名。「施設に特徴があること」1名。「指導者合意のチームワーク」1名。

○日常生活に関すること（計17名）

「入浴介助」5名。「食事介助の方法」5名。「レクリエーションについて」4名。「おむつ、トイレの介助の方法」2名。「足浴」1名。

(8) 今後の実習に役立つこと（各人から3点まであげてもらい、出された内容を4つに分類して集計）

①入所施設では

○人間関係を中心にしたこと（計13名）

「利用者への対応、接し方」6名。「コミュニケーションのとり方」4名。「言葉はゆっくり大きく」1名。「利用者の性格などよくわかること」1名。「認知症の方への接し方」1名。

○施設での仕事の内容に関すること（計1名）

「時間どおりテキパキする」1名。

○日常生活援助に関すること（計4名）

「入浴、食事介助」2名。「移動の介助」1名。「自立を援助する方法」1名。

○その他（計5名）

「レポートの書き方」1名（以下各1名）。「頑張ろうという気持ちに」。「ボランティアでもらった知識」。「事故時の対応」。「困ったときの対処方法」。

②通所施設では

○人間関係を中心にしたこと（計36名）

「コミュニケーションのとりかた」18名。「笑顔」4名。「利用者の話を聞く姿勢」2名。「大きな声で話すこと」2名。「利用者の事を思う」2名。「利用者自分との距離」1名（以下各1名）。「利用者には平等に対応」。「人の目線に合わせる」。「やさしく接する」。「利用者を大切に思

う。「いろいろな人を見守る」。「障害者の接し方」。「不安を顔に出さない」。

○施設での仕事の内容に関して（計3名）

「指導員への気配り」1名（以下各1名）。「施設のことを前もって調べておくこと」。「指導員のアドバイスをよく聞く」。

○日常生活援助に関すること（計20名）

「食事介助」7名。「レクレーションの進め方」6名。「入浴介助の方法」5名。「入浴時の着脱」1名。「足浴」1名。

○その他（計6名）

「社会の動きを知っておくこと」2名。「感染予防に注意」1名（以下各1名）。「緊張しないこと」。「施設内は清潔に」。「事故時にすぐ対応する」。

(9) ボランティア体験についての要望などあれば

①入所施設

「夏休みボランティア以外にもボランティアしたくなった」1名（以下各1名）。「食事介助の練習がしたい」。「ボランティアは楽しかった」。「バスケットクラブの遠征間で大変だった」。「来年も行きたくなった」。

②通所施設

「期間は1週間ぐらいがよい」1名（以下各1名）。「ふれ合いボランティアが出来る施設がもっと多く」。「行きたい施設へ行けなかったのもっと施設をふやしてほしい」。

4、第1段階施設実習を終えてのアンケートから

(1) 役立ったのか、役立たなかったのか

①1回生の夏休みボランティア体験とアンケートの提出以後、翌年2月に3週間の第1段階施設実習を経験した。この実習に前年のボランティア体験がどのような影響を与えているのか。役立ったのか、役立たなかったのかが検証されるべきである。実習が学年末となるなかで、その結果アンケートは2回生にすすだ6月に実施した。

②アンケート内容は

○夏休みボランティア体験が第1段階施設実施に、「大変役立った」、「役立った」、「あまり役立たなかった」、「役立たなかった」の4項目。

○どのような点で役立ったか、について簡単に記述。（「大変役立った」「役立った」の人）

○何故役立たなかったについて簡単に記述。（「あまり役立たなかった」「役立たなかった」の人）

○夏休みボランティア体験が後期授業に影響したと思うかどうか、について4項目で聞く。

○その他意見など

(2) ボランティア体験が第1段階施設実施に役立ったか

①入所施設へ行った場合（19名）

「大変役立った」5名。「役立った」9名。「あまり役立たなかった」4名。「役立たなかった」1名。

②通所施設へ行った場合（22名）

「大変役立った」2名。「役立った」16名。「あまり役立たなかった」4名。「役立たなかった」0。

(3) どのような点で役立ったか（「役立った」「大変役立った」の32名について）

①入所施設の場合（15名、複数回答あり）

「コミュニケーションの方法」7名。「ボランティアで施設の流れが理解」5名。「ボランティア体験あったので緊張しなくて済んだ」2名。「レクレーションで」1名。

②通所施設の場合（20名、複数回答あり）

「コミュニケーションの方法」9名。「高齢者の接し方」3名。「基本的マナーやあいさつ、対応」1名（以下各1名）。「高齢者の日頃の様子をみていたので何をすればよいか考えるようになった」。「子どもの接し方」。「子どもと交流ができた」。「子どもとのコミュニケーションは老人施設でも役立つ」。「レクレーションや食事介助」。「施設がどういうところか理解できた」。

(4) 何故役立たなかったか（「あまり役立たなかった」「役立たなかった」の9名について）

①入所施設の場合（4名）

「ボランティア体験期間短く積極的に動けず」2名。「ボランティア体験では実践的なことあまりせず」1名。「ボランティア施設と実施施設が異なり仕事の流れ分からず」1名。

②通所施設の場合（5名）

「中、高校生の際に何度か行ったのでボランティア体験という感じせず」1名。「ボランティア体験と実習施設が異なったので」3名。「利用者と直接係わること少なかった」1名。

(5) 後期授業への影響をみる（複数回答あり）

①入所施設では

「授業に興味持てるようになった」3名。「授業への理解が深まった」7名。「介護福祉士になろうという思いが強くなった」5名。「あまり変わらない」6名。

②通所施設では

「授業に興味持てるようになった」5名。「授業への理解が深まった」7名。「介護福祉士になろうという思いが強くなった」4名。「あまり変わらない」6名。

(6) その他意見では“次の1回生にも”など11名が記述

①入所施設では（4名）

「次の1回生にも夏休みボランティアを是非」1名。「2日目からコミュニケーションがスムーズに」1名。「施設実習でも気持ちがゆとりが」1名。「自分の興味あることで話が」1名。

②通所施設では（7名）

「次の1回生にも夏休みボランティアを是非」2名。「実習前のボランティア良かった」2名。「まずは利用者とふれあいを」1名。「ボランティアで不安解消した」1名。他1名。

Ⅲ、検証と今後への課題

1、検証の内容から

(1) 経緯のなかからみえてくるもの

①42名の学生の内、最初の「古い」のレポート提出39名を除き、「ボランティア体験の計画」、「ボランティア体験」、「体験アンケート」、「第1段階施設実習」、「実習後のアンケート」まで41名の学生が全てに参加したことはかなりの高率である。内容的にも個々の項目について「数字」のほかに多岐にわたって「コメント」も集約した。その結果本稿Ⅱの「具体的な教育実践のプロセス」の記述が長くなった。

②とりくみのはじめより、ボランティア活動、アンケート、実習など一連の経緯からみえてくることは、学生たちの介護福祉教育を受けているという意識が一直線ではないが徐々に育んでいる様子の変化である。

なお、本稿のなかで「入所施設」と「通所施設」に分けて記述しているのは、集約しやすかったことと参加者が各19名と22名の約半数に近いなかで、施設ごとの傾向をみるためである。

(2) 具体的な検証から（特徴的な点にしぼってみる）

①夏のボランティア体験後のアンケートより（入所、通所の合計）

○体験して……「よかった」…………… 41名（100%）

「悪かった」…………… 0名

○ボランティア施設は期待や要望にできていたか……「強く思う」…… 18名（44%）

「思う」…………… 22名（54%）

「思わない」…… 1名（2%）

「全く思わない」…… 0名

○特に学べたこと（各3点まで記述）……「人間関係」61項目。「施設での仕事の流れ」19項目。

「日常生活の援助」24項目。「その他」12項目。

②第1段階施設実習を終えてのアンケートより（入所、通所の合計）

○ボランティア体験が役立ったか……「大変役立った」…………… 7名（17%）

「役立った」…………… 25名（61%）

「あまり役立たなかった」…… 8名（20%）

「役立たなかった」…………… 1名（2%）

○どのような点で役立ったか（32名について。複数回答あり）……「コミュニケーションの方法」（16名）など24項目あり。

○どのような点で役立たなかったか（9名について。複数回答あり）……「ボランティア体験と実習施設が異なるので」（3名）など6項目。

○その他意見では、次の1回生にも配慮と期待を表すなど大きな成長をみせている。11名記述。

③もちろんアンケート結果のみで全ての評価検証できるものではないが、最後の実習後アンケートの意見欄で、自らの教育体験をのべるとともに「次の一回生にも夏休みボランティア体験を」と成長しているように、この一連のとりくみが学生の介護福祉教育を希求するところの動きを促すものであり、全体として「とりくんでよかった」と考えるものである。

2、今後への課題

(1) どう生かせるか

- ① ボランティア体験やレポート提出などの行為は学生に心理的負担を負わせるものである。しかし2年間の修業期間のなかで多様な勉学の一つとして積極的に受け止める限り、それは今後への財産となることは確かである。
- ② 同時に、教員にとっても問題提起するだけでなく、一定の結果の見通しと計画性、本学科の教育目標を日常的に意識しつつ創造性、独創性を生かす工夫なども求められるであろう。この一連のとりくみをどう生かすかは学生だけの問題ではなく教員も同じ立場である。

(2) 魅力と働きがいある介護福祉士の誕生を（終わりに代えて）

- ① 人が人に直接働きかけ援助する行為（作業）に携わる人は多種、多様、多数存在する。こうしたなかで介護者には対人援助の根幹に、よりよい人間関係を築くとともにもっとも人間的な営みをサポートすることが求められる。それは利用者の人格と尊厳を実現することである。
- ② 今後介護サービスの向上が求められるもとの、介護福祉士養成施設の果たす役割はさらに増すことになる。この一連のとりくみの教訓を生かし、魅力と働きがいのある介護福祉士の誕生に尽くしたい。

《参考文献》

- ① 京極高宣「これからの介護福祉教育について」
：日本介護福祉教育学会編、『介護福祉教育』NO. 22、2006年7月。
- ② 黒澤貞夫他「『現場実践』につながる介護福祉教育」～理論と実践を結ぶ教育方法を探る～
：日本介護福祉教育学会編、『介護福祉教育』NO. 21、2006年3月。
- ③ 介護福祉士のあり方及び養成プロセスの見直し等に関する検討会「これからの介護を支える人材について」
：厚生労働省社会・援護局2006年7月。
- ④ 「ならふれ合い体験2005」～（夏のボランティア体験情報誌）～
：奈良県社会福祉協議会、2005年。
- ⑤ 「夏のボランティア体験」～（サマーボランティアスクール参加募集）～
：和歌山県社会福祉協議会、他、2005年。
- ⑥ 「介護実習要綱」：奈良文化女子短期大学福祉学科、2006年7月。